

第36回 読書感想文 コンクール



作品集 2022

利尻富士町立鬼脇公民館

第三十六回 読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会

教育長 吉田 秀昭

この「読書感想文コンクール作品集」は、今年で三十六回目の発刊となりました。本年度のコンクールには、小学生七十七編、中学生五十三編、合計百三十編の応募をいただき、その中から優秀作などに輝いた作品二十九編を一冊にまとめました。

「一冊の本との出会いが人生を変える」というと大げさかもしれませんが、応募いただいた作品を一足先に読み、本から得た気づきを学びに変えることができていると感じました。読書が好きなのでも、感じたことを文章にすることを苦手とする人も多いことでしょう。それは、長い文章を相手の言いたかったことを理解しようとしながら読むこと、感じたことを他の相手に伝えるように構成を考え、ことばを選び指定された文字数にまとめて書くことが必要になる難しい課題だからだと思います。読み書きや他の相手に伝える力は、大人にも求められますが、大人になったからといって急に得られるものではありません。繰り返し体験することではか得られない能力なのです。今回の体験が、ひいては人生をより良く変えるキッカケの一つになれば嬉しいです。

活字離れ対策が必要だと言われ続けるなか、本年度改定した第三期「利尻富士町子ども読書プロジェクト」により、子どもたちが読書

に親しむ機会をより多く提供するため、図書の実業や、家庭・地域・関係各団体の啓発・活動推進しています。その一環として、各学校においては、ポピュラーサークルなどによる読み聞かせや朝読書の時間、読書週間を設けるなど、読書の習慣化を図ることに努めています。

今後もコンクールを通じてより多くの子どもたちが読書の楽しさを体験することができるよう、事業内容の充実を図るとともに、この作品集が、より多くのみなさまに読んでいただけることを願っています。

おわりに、時節柄公務が多忙のなか審査に当たられた先生方をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後とも多くの子どもたちの個性、可能性を引き出すため、読書活動の推進にご尽力いただきますようお願い申し上げます、発刊のことばといたします。

【作品集 目次】

小学校一学年の部

☆ 優秀作

『おちんじのおぼけやじき』をよんで

鷺泊おじごまの小学校 一年 大関おおせき

夕楓ゆうか・・・6



小学校二学年の部

☆ 優秀作

『先生、感想文、書けません!』

鷺泊おじごまの小学校 一年 岡田おかた

啓児けいじ・・・6

★ 佳作

『ぼろぼろザウルス』を讀んで

鷺泊おじごまの小学校 一年 小林こばやし

聖法まきのり・・・7

『10万回生まれたねじ』を讀んで

鷺泊おじごまの小学校 一年 須田すだ

巧海たくみ・・・7

小学校二学年の部

☆ 優秀作

『みんなのためいき図鑑』

鷺泊小学校 三年 小野寺 雫しずく …… 8

★ 佳作

『かいじゅうパパ』を読んで

利尻小学校 三年 牧野 まきの 泰希たいき …… 9

ふじたに会ってみたい

鷺泊小学校 三年 川村 かむむら 柚珠月ゆすき …… 10

★ 奨励賞

何とせいのいんごのういほんぼろきり

鷺泊小学校 三年 中山 なかやま 照久てるひさ …… 11

小学校四学年の部

☆ 優秀作

『いのちのすくいかた』を読んで

鷺泊小学校 四年 国分 こくぶん 七南ななみ …… 12

★ 佳作

『みんな、ワンダー』を読んで

鷺泊小学校 四年 前田 まえだ 羽玖はく …… 13

『願いがかなうふしぎな日記』を読んで

鷺泊小学校 四年 須田 すた ひまり …… 14

★ 奨励賞

『ちいちゃんのがげおくの』を読んで

利尻小学校 四年 関 せき 萌果もえか …… 15



小学校五学年の部

☆ 優秀作

『愛と不思議にみちた動物の世界』

利尻小学校 五年 寺島 信源 …… 16

★ 佳作

『トム・ソーヤの冒険』を読んで

利尻小学校 五年 飯田 乃唯 …… 17

『警察人になったアンズ

命を救われたトイプードルの物語』

鷺泊小学校 五年 佐藤 陽向 …… 18



小学校六学年の部

☆ 優秀作

やっぱり野球が好き!!

鷺泊小学校 六年 中山 智晴 …… 19

★ 佳作

「この本を読んで得たもの」

鷺泊小学校 六年 川村 栞 …… 20

曾祖母の遺した『利尻の方言かるた』

鷺泊小学校 六年 佐藤 周宥 …… 21

★ 奨励賞

『半分のおんげん』を読んで

鷺泊小学校 六年 須田 海司 …… 23

中学校の部

☆ 優秀作

『不滅のウイルス』を読んで

鷺沼中学校 三年 寺田 はな・・・ 24

『余命10年』を読んで

鬼脇中学校 三年 牧野 泰夏・・・ 25

★ 佳作

『かくれ家のアンネ・フランク』を読んで

鷺沼中学校 一年 黒川 結凧・・・ 26

『思ひ出のまじない』

鷺沼中学校 一年 出張 星空・・・ 27

『14歳』

鬼脇中学校 一年 尾上 おとめ・・・ 28



『母さんの「あおいぐま」』を読んで

鬼脇中学校 一年 河越 姫花・・・ 29

『夜のピクニック』

鬼脇中学校 一年 佐々木 日馬・・・ 30

★ 奨励賞

『世界がもし100人の村だったら』

鷺沼中学校 三年 入井 蒼士・・・ 31

『海の祭礼』

鷺沼中学校 三年 西島 一樹・・・ 32

『西の魔女が死んだ』

鬼脇中学校 一年 牧野 結来・・・ 33

小学校一学年の部

☆ 優秀作
へんしゅうさく

『きょうふうのおばけやしき』をよんで



鷺泊小学校 一年 大関 夕楓
さしほまの おおせき ゆうか

わたしがこのほんをえらんだらゆめは、おもいごとだったからです。

きゅべたまたんていたちがおばけやしきにいきます。

ころころのこつたころは、おばけやしきにおばけがでたころがこわそうだったからです。

じぶんだったら、おばけやしきにはいきません。

じつじゆし

一年生でたった一人だけの出品。本を選んだ理由や心に

残して書いておきたいことを書いておこう。



小学校二学年の部

☆ 優秀作
へんしゅうさく

『先生、感想文、書けません！』



鷺泊小学校 二年 岡田 啓児
さしほまの おかた けいじ

「読書かんそう文を書きたくないなあ。」と話していたら、夏休みにさっぽろに行った時におじいちゃんがこの本をプレゼントしてくれました。

かんそう文が書けないみずかが、友だちのあかねと自分たちでおもしろい本を作って、その本でかんそう文を書くお話です。「あかねおねえちゃん、がんばるー」という名で、あかねが弟のタクちゃんのピンチを何どもすくっています。

タクちゃんがダダコにたべられた時はびっくりしました。かぞくや自分がいの人を大切におもつことを、みずかが「あい」と言っていてすてきな、とおもいました。

おもしろい本を読むと「よかったなあ、おもしろかったなあ、かわいそうな話は」「かわいそう」「しか書けないにきまつると言ったみずかやほくも同じ気もちです。

さいごのみずかのかんそう文にはいろんな気もちが書いてありました。

ほくは学校で友だちやマンガを書いたりしていたから、みずかとあかねの作ったお話をこうかんして読みあいたいです。

ぼくもみずかみたにおもしろいかなそう文が書けるように、いろいろな本を読みたいです。

じつひょう

選んだ本のタイトルが興味を引く。作中の主人公と自分の行動を重ねて、感想文を書くのは難しいという気持ちをリンクさせている。本人の素直な思いを書くことができてる。

★ 佳作

『ほねほねザウルス』を読んで



鷺泊小学校 一年 小林 聖法

ほねほねザウルスは、ほねほねザウルスの三人の子どものぼっけんのおはなしです。

さいしゅ三人は、ともだちのビットに会いに行きました。そしてビットが見せるものがあるとホネドラシルにいきましました。ホネドラシルはきさまの木です。ぼくもこんな木なのが見たいとおもいました。

ほかにもでんせつのうまほねほねスレイプールやホネドラシードというまちがあって、おもしろかったです。

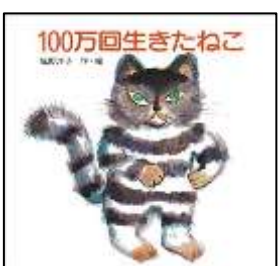
ぼくもほねほねザウルスの三人とーしょにぼっけんにいきます。

じつひょう

本に登場する人物や場所を見てみたいと書いており、自分も作品の中の世界に入りたいという思いが伝わる。

★ 佳作

『100万回生きたねこ』を読んで



鷺泊小学校 一年 須田 巧海

ぼくがこの本をえらんだりゆうは、100万回生きたねこという名前がおもしろかったからです。このお話はねこがしんで生きかえってをくりかえすおもしろいお話ですが、さいごにしんでしまうかなしいお話でもあります。

ぼくが心にくったところは、さいごだけねこがしんでしまったところです。

なぜかといつと、100万回も生きかえたあねこが、なぜさいごだけ生きかえらなかつたのだらうとふてきに思いました。

じつひょう

本のあらすじ紹介がまじまじと文章が分かります。「100万回も生き返ったねこが、とうとう最後は死んでしまったらう」と本を読んで感じた疑問についても書くことができてる。

小学校二年生の部

☆ 優秀作

『みんなのためいき図鑑』を読んで



鷺泊小学校 三年 小野寺 雫

この本は、「たのちゃん」という男の子が、クラスの班で、ためいきの図鑑を作るお話です。

ためいきは、つかれた時や面うつろいする時に出ると思っていたのですが、この図鑑にはどんなためいきが出るのか気になりました。

わたしがよくためいきをつく時は、ゲームをしていておてつだいをたのまれた時や、しゅくだいがいっぱいある時です。

たのちゃんには、友達の「かせどうさん」が書いてくれた絵からとび出した、「ためいきじゅっ」がいます。もし、わたしのためいきじょうがあらわれたら、「じゅっしたためいきがでるの？」と聞いてみたいです。

この本のおもしろかったところは、たのちゃんのお母さんが、「これは、何のためいきでしょう」と、クイズを出しているシーンです。

わたしのためいきを聞いたら、たのちゃんも、「ほじらなくを思いついたのと同じように思いついたためいきはないか？」とおもしろい「ためいき」を思いつきました。

たのちゃんの班では、図鑑の絵を書きたい人が二人いましたが、どちらもめずらしくケンカになってしまいました。そこで、たのちゃんが二人の間に入って話し合いができるようにしました。わたしのまわりでももしケンカをしている友達がいいたら、たのちゃんのようにしてあげたいと思いました。

わたしは、せいしょはためいきをしついでにいろいろなイメージがありました。が、せいしょにかんせつしたためいき図鑑を見ると「ためいきは体をリラックスさせることができるのだから、おもしろい」と書いてあり、いいこともあるんだなと思いました。

【講評】

疲れたときに出る「ためいき」の図鑑とは何か、と興味を引くタイトル。ただ一言に「ためいき」と言っても、場の状況によって、さすがに違いがあったり、感情の入りが違ったりすることから、読んでみたいと思える文章になっていると感じた。



★ 佳作

『かいじゅうパパ』を読んで



利尻小学校 三年 牧野 泰希
まきの たいき

ぼくは、『かいじゅうパパ』を読んで、パパがかいじゅうになるといじょうがらこい思ったのでこの本をえらびました。

登場人物は、ぼくとパパとママです。主人公のぼくは、パパと遊びたがりやです。このお話は、ぼくがパパと遊びたいのこいも、

「このいね。」
と言われて、うそつきパパだと思っていました。だけどある日パパがうせんかいじゅうになったことうそつきパパから元のパパにもうても心はやさしいかいじゅうのパパのままだったお話です。

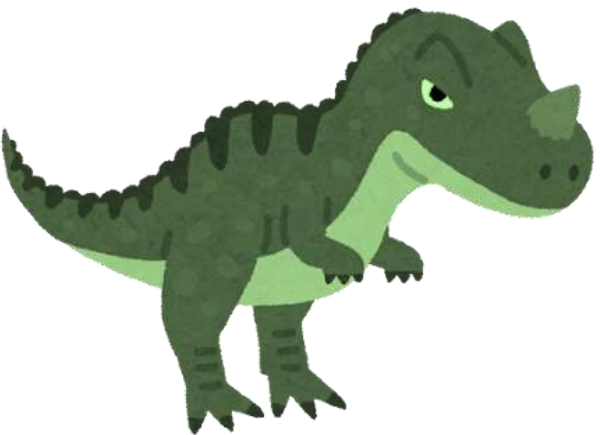
ぼくは心このこった場面がこいあります。こい目は、ぼくとママがかいじゅうになったパパを見てびくりしていたこころです。なせなら、うそつきうせんすきうせんくびくりにしたからです。こい目は、パパがかいじゅうのまま遊園地に遊びに行ったこころです。なせならぼくの、パパがかいじゅうのまま、遊園地に遊びに行ったら少しはすかしい、パパがかいじゅうになって人気者になったら、少しはすかしいからです。

ぼくも主人公のぼくと同じで、パパと遊びたがりやです。でも、ぼくのパパはかいじゅうにはなれません。もしパパがかいじゅうになったら直す方ぼくをうせんとこいして、直したらパパはこいだけうせんと遊びたがりやです。

町にかいじゅうになるパパがいっぱいいるようになったけれど、それはかいじゅうになったことで子どもの気持ちが分かるようになったことがとてもいいことだと思いました。一日たったらかいじゅうから元のパパにもどるけれど、子どもの気持ちを分かってくれるやさしいパパがたくさんいてくれるといいなと思いました。ぼくもやさしいパパとこれからたくさん遊んで楽しい毎日になりたいと思います。

【講評】

本に登場する「ぼく」と自分をこいにくくせ、「もしパパがかいじゅうになってしまったら」と想像を巡らせるといじょうがらこい。パパに對する素直な思いがよく伝わる。



★ 佳作

ふうたに会ってみたい



鷺泊小学校 三年 川村 柚珠月
かわむら ゆずき

私がなぜ、この本を読もうと思ったかと言いつと、表紙の絵がかわいく、『ふうたのほしきね』という題名が気になったからです。

このお話には、子ぎつねのふうたと人間の兄妹が出てきます。林でまいごになった兄妹を助けるために、お星さまに相談し兄妹を助けるお話です。

このお話で、一番心にとったところは、ふうたが五人の大人を兄妹のもとへ案内したところ。なぜかと言いつと、ふうたが二人の兄妹を助けるために、女の子のすがたになったので、「人間に化けられるんだ!!」と思いました。そして、とてもやさしい子ぎつねだなと思いました。私は、きつねにも人間を助けようとする心があるんだなと思いました。

私がこの本を読んで思ったことは、こまっている人がいた時は、私も助けてあげたいなと思いました。理由は、ふうたが五人の大人を案内した時に、大人たちに会えた兄妹が、とてもうれしそうだったので、こまっている人を助けるというのは、相手にとってもうれしいんだなと思いました。

これから私も、こまっている人を見かけたら、ふうたのように、助けてあげたいなと思いました。

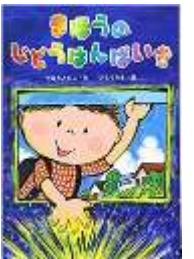
【講評】
こうひょう

あらすじの紹介が簡潔で分かりやすくまとまっている。子ぎつねのふうたが林に迷い込んだ人間の兄弟を助けるため、いろいろな行動をする姿から、自分も困っている友達を見かけたら助けてあげたいよ、これからの生活と関連付けている。



★ 奨励賞

回でもどいへんごきんちほなごれ



鷺泊小学校 三年 中山 照久
なかもま てるひさ

まは、『まほのごきんちほなごれ』この本を読みました。題名を思っ、まなまのがどいへんごきんちほなごれなごの、想をいつわむつもだ。

この本は、主人公のじいさんが、ボタンをおすよその時必要なものがどいへんちほなごきんちほなごれを思っけるお話です。ちほなごに残ったじいさんは、お母なごがじいさんはちほなごをけっつきましたじいさんです。

じいさんは、毎日、今日はなにがどいへんちほなごれとわくわくしながらボタンをおしていたと思います。それが、とっせんきえてしまった、「なごせんをじいさんの」とお母なごをゆるせないうちかかないうちかで心がらっほらだったと思います。ほくもじいさん、わくわくしながら読んでいたので、ショックでした。

まっ、まほのじいさんはちほなごがあつたら、ほらだったら、かわいいうペットがどいへんちほなご思っます。

まは、この本を読んで、もっと本を読むのがすきになりました。とっ、このお話のような本だったらありえないようならしほなごがすきです。ゆるを思っけるみたいじいさんが本だったらいいなと思っ、読んどいへんちほなご思っます。

じいからもじいさんいろいろな本を読んで、楽しいせかいを思っける、すじいさんと思っます。

【講評】

今の世の読つておのどいへんごきんちほなごれ『まほのじいさんちほなごれ』が、まっ読書した回数か読つてか、自身の生活と関係はたして書いじやどいへんご。文筆全体を讀んで、このお話のファンタジー世界にたの楽つて読書はたしていへん。



小学校四年生の部

☆ 優秀作

『このちのすへいかた』を読んで



鷺泊小学校 四年 国分 こくぶん 七南 ななみ

表紙の子犬が、とても悲しそうな目でこっちを見ているのが気になって、この本をえらびました。

作者は、すてられた犬やねこが、この後どうなるか知りたくて自分で調べて本にしていました。すてられた犬やねこは、地いきで言い方はちがうけれど、動物収容し設という所に収容されて、飼い主が迎えに来なかったら、何日か後に殺されてしまうそうです。

すごくびっくりしたのが、一年間で殺しよ分される動物の数。犬は約三万頭、ねこは約十万頭と書かれていて、とても悲しくなりました。すてる理由は、言うことを聞かないから、くさいし部屋をよごすから、あきたから、かわいくないからなど、人間の勝手な理由で、なんでこんな人達にかわれてしまったんだろうと思いました。人間の子どもなら、大変でも、かんたんにすてるはずなのに、どうして動物はすてていいという考えになるのか分からないし、かい主にすてられて殺されるなんて、かわいそうでキョーッと苦しくなりました。動物だってもっと生きたいはずなのに、言葉がしゃべれないから、小さな動物の目が、助けてほしいって言っているのみな気がします。

すてられた犬やねこを助けるのに、最後まで家族としてくらすのは当たり前だけど、動物収容し設で、新しいかい主をさがす取り組みがあるということを知りました。病気などがなく調べて、じょうとうこうほ犬というのにえらばれたら、新しいかい主にかつてもらえるかもしれないチャンスがあるみたいで、私はすごくうれしくなりました。

私が一番心に残ったところは、表紙の子犬のクウに新しいかい主が見つかったことです。すごくうれしくてシーンとしました。クウは、大好きなお母さんや兄妹とはなれて悲しかったと思うけど、新しい家族ができて、きっと幸せな毎日を送っているんだと思うとうれしいです。

私は動物が大好きで、大きくなったら動物に関わる仕事をしたいと思っています。この本を読むことができて良かったです。

私の家にも、十一歳になる愛犬がいます。もうおじいちゃんや、大変なこともふえてきたけど、かわいくて仕方ないです。こんな大切な家族の命をぜったいにすてられないし、話せない分、ちゃんと見てあげないといけないと思います。私の家に来て良かったと思ってもらえるように、これからも大切にしていきたいです。

【講評】

捨て犬・捨て猫の現状について書かれた本。飼い主が現れずやむなく殺処分されてしまう動物たちの数の多さに、本人は驚きと悲しさを感じた様子。身勝手な理由で捨てられる動物たちがいることを知り、今後動物を大切にしようという思いが強々伝わっている。



★ 佳作

『みんな、ワンダー』を読んで



鷺泊小学校 四年 前田 羽玖
まえだ はく

ぼくがこの本をえらんだ理由は、表紙の男の子がかた目しかなく、びっくらしたので読んでみたいなと思ったからです。

この本は、とある町に住む、生まれつきかた目しかないオギーという男の子のお話です。オギーは自分の見た目がふうつうじゃないと分かっていました。けれどかた目がなければみんなと同じことはできました。自転車にも乗るし、アイスクリームも食べるし、ボール遊びまでできます。

しかし、他の子と見た目がちがうただけで、じろじろ見たり、指さして笑ったり、へいきでぼくの悪口までいってやる。

そこでぼくは、もし自分がオギーだったら、じろじろ見られるのもいやだし、指さしされたり、悪口を言われたりするのはいやだなと思います。

でもオギーは、いやなことを聞きたくない時は、ヘルメットをかぶり、愛犬デイジーとともに、うちゅうへもうそこのたびにでかけます。

ぼくはこのいやなことを聞きたくない時に、ヘルメットをかぶるといってころがいてアイディアだなと思いました。

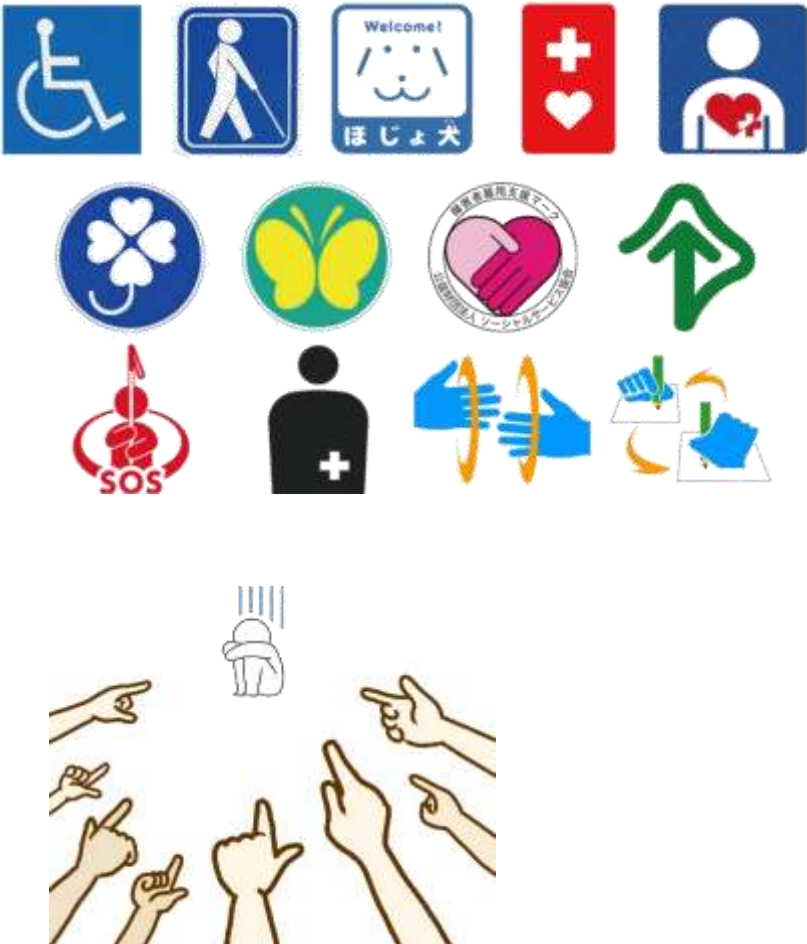
オギーはうちゅうをもうそこの時に、地球には、たくさんの人がいることに気づきました。何十億もの人がいいて、はだもかも話し方も一人一人みんなちがうことに気づきました。

だから、自分もちがってもいいんだと思いました。

ぼくは、これを読んで、一人一人のちがいをりかいして、みんながそれぞれ思いやりのある行動をしようと、いじめや、いやなことが、どんどん減ると思いました。

【講評】

生まれつき片目しかない主人公オギーが、見た目の違いだけで、悪口を言われたり、からかわれたりする内容を読んで、一人一人の違いを理解して、思いやりのある行動を心掛けよう、と、かわらの生活と関連させている。いじめを減らしたいという気持ちがよく伝わっている。



★ 佳作

『願いがかなうふしぎな日記』を読んで



鷺泊小学校 四年 須田 ひまり

私が読んだ本は、『願いがかなうふしぎな日記』という本です。私がこの本を読もうと思ったきっかけは、

「むじつて日記で願いをかなえられるんだらいい。」と、少しふしぎに思えたからです。

このお話は、主人公の光平が、おばあちゃんからもらったふしぎな日記に願いを書くと、なくなったはずのおばあちゃんに会うことができたり、夫婦ゲンカをしていた両親が、家に帰ると仲直りをしていたりするふしぎなお話です。

私が心のこもったところは、なくなったはずのおばあちゃんにもう一度会えた場面です。

だって、いるはずのないおばあちゃんがいたのですから。こんなことが起こると、だれでもおどろかないことはありません。私にこんなことが起こったら、うれしさより、おどろきの気持ちの方が強いと思います。



私と光平は、似ている気がします。運動もとくいではなく、べん強も苦手なところとか。でも、光平は一回の夏休みで、五十メートルも泳げるようになったのです。それは、ふしぎな日記に書いたからでもあります。自分で努力したからでもあります。光平は望みに向かって努力したから泳げるようになったのです。私はそんな光平のようになりたいです。私もなにかにチャレンジして、光平をこえるようになりたいです。



【講評】

お話の紹介、心に残ったことが分かります。主人公と自分に似ている主人公が、あんな苦しい努力を克服しようとする主人公のようになりたいと書かれており、読書を通じて目標を設定するようになっています。

★ 奨励賞

『ちいちゃんのかげおくり』を読んで



利尻小学校 四年 関 萌果

わたしは、本を読むことが好きでいつも本を読みます。だから、学校からの宿題で読書感想文が出たときに何の本を読むのか楽しみだという気持ちになりました。せっかくなので、あまり読んだことがない本を読みたいと思い、前に買ってもらっていた『ちいちゃんのかげおくり』という本を読んでみようと思いました。

この本を読もうと思ったとき、かげおくりとは何だろうと思うました。

『ちいちゃんのかげおくり』には、ちいちゃんという人が出てきます。この人はかげおくりという遊びをしています。きっかけはお父さんがせんそうに行く前日にこの遊びを教えてくださいました。

「今日の記念写真だね。」

などと家族で言いあいながら、かげぼつしが空にうつって見えるかげぼつしの遊びをします。そして、せんそうがはげしくなり、家族がいなくなったちいちゃんが思い出の中で家族と再会するお話です。

この本で気がついたことは、家族でかげおくりの遊びをするところなんです。これが気がなった理由は、かげおくりの遊びを知らなかったからです。わたしもちいちゃんのようにならなう、家族でかげおくりをしてみたいという気持ちになりました。

また、はす向かいのおばさんに家族の場所を聞かれて、いなくなってしまうことを言わなかったというところが気になりました。ちいちゃんはその時一人ぼっちだったので、さみしくてこわい気持ちだったのかなと思いました。だから家族にいてほしい気持ちをこめてそのように言ったのだと思います。わたしはちいちゃんの行動に対してさみしいと感じました。わたしはちいちゃんのようにならず、家族と一緒にいたいのです。

【講評】

あまり読んだことのない本にチャレンジしている。登場人物のちいちゃんにふれながら、平和であることや家族の大切さについて考えることができている。



小学校五学年の部

☆ 優秀作

『愛と不思議にみちた動物の世界』



利尻小学校 五年 寺島 信源
てらしま しんげん

ぼくが、この本をえらんだ理由は、愛と不思議というきれいな
ひびきの言葉にきょう味を持ったからです。

この本には、人と動物がどちらも心を持っているということが
書かれています。

中でもぼくが心に残ったお話が、三つあります。一つ目は、ワ
ニが自分の子どもを守るお話です。ぼくはこの話を読んで、子ど
もを守ろうとする心がワニにもあるんだなと思いました。ワニは
こわい一面もありますが、子どもを守ろうとする一面があるとい
うことを初めて知って、とても意外でおどろきました。

二つ目は、イルカが船から落ちた人を助けるお話です。ぼくは
この話を読んで、イルカは死にそくな人を助けようとする心を持
っているんだなと思いました。イルカは人のうでをかみちぎれる
ほど、あごが強いのに人にはかまわないで逆に助けようとする心が
あることを知って意外で不思議に思いました。

三つ目は、のらねごと仲よくしていた家族がひっこしてしま
いましたが、なぜかそここのらねごと訪ねてきて子ねごを置いてい
くお話です。ぼくはこの話を読んで、ねごは一度愛した人をわす
れないうつ心を持っているんだなと思いました。のらねごは人
をひっかいたりするのだから、のらねごが人を愛することなんてある

とを初めて知りました。ぼくも家でねごをかっていますが、ぼく
がいますとわるとひびの上ののっかってきてくれます。

ぼくは、この本を読んで動物にも愛や心があるんだなと、あら
ためて思い感動しました。この世界にはだいたい百万種べららの
動物がいるので、もっと動物の愛や心のことを知りたいです。そ
して不思議のことも知りたいです。

この本を読むと動物たちの生活や体の仕組みが、よく分かります。
さまざまに新しい発見がありとてもおもしろいのでぜひ読んで
みてください。

【講評】 こうひやう

タイトルのきれいな響きに興味を持ち選んでいる。本を選んだ理由から
始まり、本の簡単な説明、心に残った話、感想のまとめと構成が分かりや
すく読みやすい文章になっている。さらに動物の不思議なことについて知
りたいと、読書を通して意欲が増している。



★ 佳作

『トム・ソーヤの冒険』を読んで



利尻小学校 五年 飯田 乃唯
いいた のい

『トム・ソーヤの冒険』は、元気いっぱい少年トムが友達とのハックや、ベッキーとさまざまな冒険をする物語です。

私がこの本をえらんだ理由は、どんな冒険をするのか楽しみだったからです。

まず、私がおもしろいと思ったところは、ペンキぬりをたのまれたトムが楽しそうにペンキをぬることで、友達がペンキぬりをやりたくなるようにしむけて、宝物までもらってしまつところが好きだと思います。私は、そんなにかしくくないので、だれかに楽しみながら仕事をさせるなんて思いつきませんでした。それはとってもかしいなと思いました。

次に、私がかわかったのは、トムが殺人事件を目撃したところ。私だったらかわすぎて泣きさげんでしまつかもしれない。さいばんのときにも、トムは堂々と証言をして、とても勇気があるなと思いました。私もトムのように勇気を持って行動したいなと思いました。

次にドキドキした話は友達三人とイカダを作つてかいぞく島に行くところ。テントを建ててとまったり朝ご飯を作つたり、とっても楽しそうだと思います。嵐が来てかみなりがおちて、あぶなく死にそうになったりしたいへんな目に合つたけれど、いかにえっていられてよかったです。三人のおそろしきをしてい

ときにかえってきて、みんなをびくつかせるところがおもしろかったです。

最後に一番びっくりした話はまよつてしまつときけんなどところいほうをさがしに入つていくところ。私はきけんなどところに行くのはこわいので、きけんをきかせずに行けるのがすこいなと思いました。金かを見つけることができたとき、自分もそこいたような気分になつて、うれしかったです。

トムはイタズラ好きであぶないことをたくさんするけど、友達思いのやさしい男の子でした。私もトムのように友達のために行動できるようになりたいと思います。いろいろな場所へ行つたり、きれいな景色を見たり、ふだんの生活の中にも小さな冒険を見つけれようになりたいと思います。

この本を読んで学んだことは、友達の大切さ、ゆめをもつこと、そしてなにより人を思いやる心を持つことです。困っている人がいたら、自分から声をかけて安心してもらえるような人になりたいと思います。

大人になつてもゆめをあきらめず冒険心を忘れないようになりたいと思います。

みなさんもトム・ソーヤの冒険を読んでみてください。

【講評】

お話を読んで、おもしろかった点、かわかった点、ドキドキした点、びっくりした点の四点をしつと細かく書いてみました。まだ、読書を通じて、友達の大切さを夢を持つこと、人を思いやる心を持つこと、多くを学び吸収しています。

★ 佳作

『警察犬になったアンズ』

命を救われたトイプードルの物語』



鷺泊小学校

五年

佐藤 陽向

「警察犬」と聞いて、どういう仕事をしているかわかりますか。私は気になったので、この本を選びました。

この本では、飼い主からぎゃくたいをつけて、指導センターに「いらぬ」と言われてすてられたトイプードルのアンズ。アンズはその時、殺処分寸前でした。しかし警察犬の指導者が引き取ってくれるということになりました。それからアンズは、様々なかべをこえ、先ばい犬の力を借りながら、様々な賞を獲得し、ぶじに警察犬になりました。それから、様々な賞を獲得し、ぶじに警察犬になりました。今後は救われる側から、救う側になりました。また、警察犬の仕事もしょうかいしてくれています。

この本を読んで一番心に残ったのは、先ばい犬が訓練をしていいる時に、アンズが二本足で立ち上がった、今までに見たことがないくらいにほえているところです。私は、「自分も警察犬になって、色々な人を救いたい」と言っているように聞きました。私は、この場面がアンズの警察犬になるきっかけだと考えました。

私は最初、ほかの警察犬は大きい犬種なのに、こんなに小さい犬種で警察犬になれるのか。と不安になりました。でもアンズはあきらめず、がんばって訓練を続けていて、すごいなと思いました。

この本を読んで、アンズみたいにあきらめず、仲間と協力してがんばれば、できないことはない。と感じました。私も、これから大変なことがあっても、あきらめずに仲間と協力して、がんばろうと思いました。

【講評】

警察犬の訓練中、主人公のトイプードルのアンズが立ち上がった吠えるシーンを読んで、アンズがどうして吠えたのか、心情を考えている。また、あきらめずに見事警察犬になったアンズから、自分もあきらめず友達や仲間と協力して頑張ろうと、今後の生活と結び付けている。



小学校六年生の部

☆ 優秀作

やっぱり野球が好き!!



鷺泊小学校 六年 なかやま 中山 ともはる 智晴

ぼくは、『はるかなる甲子園』という本を読みました。なぜこの本を選んだのかというと、この本を書いた栗山英樹監督がおっしゃっていた「好きなことを大事に」という言葉が忘れられなくて、もっと知りたいと思ったからです。

この本には、栗山英樹監督が、甲子園の解説をしていて、心に残った高校野球のエピソードが書かれています。

色々な話があるなかで、ぼくが一番心に残った場面は、興南高校・我喜屋優監督が目指す「選手の育て方」という話です。

高校一年生から野球を始めた我喜屋監督は、球拾いで三年間終わるかもしれない、でもまずそこを必死でやろうじゃないかと、出来ることに全力を尽くしました。

ぼくは、バッティングの練習は好きですが、球拾いのような仕事はあまり好きではありません。疲れていて、だれか拾ってくれないかなと思ってしまふことがあります。

でも、我喜屋監督は、球拾いにも、自分で意味を見いだしました。やらされてやるのではなく、できるだけ早く、人よりの多く拾い、それも練習の一つと考え、取り組んだことで信頼される選手になりました。

また、我喜屋監督は「小さいところに気付く子は大きな仕事出来る」とも言っています。

ぼくは、小さなことに気を配ることが苦手です。練習の時、自分より先に周りの人がゴミを捨てたり、グローブの向きを整えたりしているのを見て、はっと気づくことが多くあります。

でも、やはりそれができる人は、試合でも良いプレーができると思います。小さなことでもすぐに動けるというのは、決められた練習時間に全力をつくして、集中できているということになるからです。

このように、細かい部分までこだわって、目標に向かって努力することは、簡単にできることはありませんが、とてもカッコいいことだと思います。

ぼくは、この本を読んで、変わったことがあります。それは、甲子園の見方です。今までは、ただなんとなく、テレビで入っている試合を見ているだけでした。

でも、試合に出てくる選手、ベンチにいる選手、アルプスで応援している選手、一人ひとりが小さいことを積み重ねて甲子園の場に立っているのだということがわかり、見ていて心が熱くなるようになりました。

自分の少年団の練習も一緒です。一日一日を大切にしたいと思えるようになり、道具の手入れも丁寧にするように心がけています。

栗山英樹監督とこの本に出会って、ぼくは今まで以上に野球が好きになりました。この気持ちを信じて、野球を好きでい続ける喜びを覚えてもらったことは、ぼくにとって宝物です。

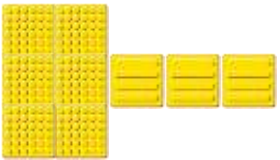
今年、ぼくは少年団最後の年です。最後には、胸をはって楽しかったと笑えるように、自主練習もチームの練習も、小さなことにも全力でがんばります。

【講評】
うみこん

この本を読んでから児童の甲子園入の見方が変わって、出場して選手以外にも目を向け、小さなことの積み重ねで甲子園に入るとのことを感じ、自分も所属する少年団の練習を頑張ろうと、「かわからの生活」と関連させたのがよかった。



I LOVE YOU



★ 佳作

「この本を読んで得たもの」



鷺泊小学校 六年 川村 栞
かわむら しのり

私は今回、『五体不満足』という本を読みました。この本は、生まれつき手足の無い若者の、生まれた時から大学時代までの、出来事を書いた本です。なぜこの本を選んだのかと言うと、図書室でこの本を見つけた時、タイトルを見て、何か聞いたことあるな…と思います、何となく借りたからです。そして、この本を読んで私は、二つの教訓を得ました。

一つ目は、役に立つことについてです。若者は、小学五年生の時に、教室のそうじが上手くできなく、大変な思いをしました。そして、それを見た担任の先生が、若者にワープロを貸し、みんながそうじをしている間は、授業等で使うプリントを作るといって言ったそうです。私は最初、なんでワープロ…と疑問に思っていました。若者が、「これは、みんなと同じようにすることができなければ、その他のことで補えばいい。」という考えだ。」と語っていました。私は、つい、「みんなと同じようにすることばかり考えてしまうタイプなので、その考えを使えば、もう少し色々なことができたかもしれないと思いました。

二つ目は、認識についてです。若者は国語の時間に、「特徴」と「特長」の違いについて学びました。「特徴」は、単なる違いだけを表しますが、「特長」は、他とは違う「優れた部分」を表します。その日以来、自己紹介等で「特徴・手足がない」と書いていたのを、「特長」と書くようになったと言っています。そして、そ

これは若者が手足がないから自分なんだ。だれも自分になることはできないと思っているからだと思いました。人は、物事の片面だけを見がちだと思います。でも若者がみずからの障害を「特長」としてとらえているのを見て、もしかしたら私にも、周りから見たら何でもないけれど、実は特長として胸を張って言えるところがあるのではないかと少し自信がつかまりました。

今回は、人生の教訓だと思った二つの考えを書きましたが、この本には人生において大切なことがたくさん書いてあります。私の様な小学生だけでなく、この本を読んだことの無いすべての人にこの『五体不満足』を読んでもほしい、そしてそれと同時に、この本を読んで得た教訓を胸に、中学への新たなステップに進んでいきたいと思います。



【講評】
ウチコウ

この本を読んで児童が考えたことが二点書かれている。「みんなと同じじゃなくても、別の場で補えばいい」という考えを持って生活したいと書かれている。また、生まれつき手足のない若者が「これが自分なんだ」と考えるようになったことから、自分にも胸を張って、自信をもちたいところがあるかもしれないと語られている。

★ 佳作

曾祖母の遺した『利尻の方言かるた』



鶯泊小学校 六年 佐藤 周宥
（なとう じゅうゆう）

みなさんは、利尻の方言をどのくらい知っているだろうか。私は利尻で育ったが、自分が方言を使っているという認識はない。しかし、家族内で、父と母の使う言葉がどことなく違うことには気がついていた。父は利尻、母は釧路出身である。そこで父に、よく使う方言をたずねてみると、何が方言なのかわからないという感じの答えが返ってきた。

これをきっかけに私は方言に興味を持ち、一冊の本を見つけた。それが今回読んだ『利尻の方言かるた』である。この本は、利尻の方言を「あ」から「ん」までのかるたにして紹介しており、気軽に利尻の文化に触れることができる。著者は佐藤萬、私の曾祖母だ。

わかるかな？

- ① 【あが】
- ② 【あっぺ】
- ③ 【あべ】
- ④ 【あめる】
- ⑤ 【いいふりごぎ】
- ⑥ 【うだで】
- ⑦ 【おめだじ】
- ⑧ 【おらえ】
- ⑨ 【かちゃくぢゃない】
- ⑩ 【がんぜ】
- ⑪ 【け】
- ⑫ 【ごめ】
- ⑬ 【ちょす】
- ⑭ 【どんづく】
- ⑮ 【ゆるくない】
- ⑯ 【わらしゃんど】

今まで私は、曾祖母が本を出していることを知らなかった。この本のあとがきによると曾祖母は、大正十二年利尻本泊で生まれ、北海道女子師範学校一期生として学び、沓形国民学校、本泊国民学校で六年教えている。島の女性教師の先駆けだったようだ。私にとっては、物静かな優しいおばあちゃんだったが、こんな一面があったのだ。曾祖母の時代、利尻は、ニシン漁で活気にあふれ、人々は、厳しい自然と向き合いながら生きていた。このかるたには、曾祖母の目に映る当時の生き生きとした人々の姿が、刻まれている。

「じいとおもしろいと思った札を紹介する。

「りりくねまる りりりびじ」

(利尻富士はいつもりりしく鎮座している。)

「んだでばんだっけんだってばしゃべるかっちゃん 笑い顔」
(そうです、そうでしたか、そうですとも、としゃべる母さんの笑い顔。)

一枚目の札は、昔も今も変わらずそこにある利尻富士の姿が描かれている。

「そくむ、ねまね。」

父は、曾祖母に言われていたらしい。ねまるという言葉には「ちよつとこつち来て座れ」というように人の親しみが込められている。私は最初この札は、利尻富士の雄大さや神々しさを表した札なのかと思った。しかし、父は、利尻富士への親しみなのだを教えてくれた。方言には、方言を使う人たちで共有できる微妙なニュアンスがあるのだろう。

一枚目の札は、笑いが飛び交う女性のお茶のみの様子である。今でも「んだ」は同意の意味で使われるそうだが、真似をしても

どうも不自然になってしまふ。曾祖母に実際どのようなように発音するのか聞いてみたかったが、三年前に亡くなっており少し遅かった。今回、「利尻かるた」を読み、方言を残していきたいと思うようになった。方言は、使う人の一体感を高め、歴史をつなぐことができ、なまりの一言で済ませてはいけない気がする。曾祖母が残してくれたこの本のおかげで、方言の良さを知ることができた。これは曾祖母の私へのプレゼントであり、次の世代へのバトンとしてつなげるべきものだ。

【講評】

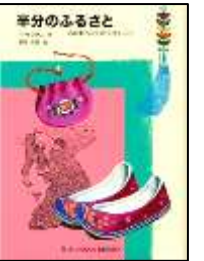
自分が住む町の方言に興味を持ち、この本を見つけている。方言なまりの一言で済ませず、土地に暮らす人々の一体感を高めるものだと感じ、大人になっても方言をのこしていきたいという思いがよく伝わっている。

何種類わかったかな？

- 【①】 あかちゃん
- 【②】 反対
- 【③】 行きましょう
- 【④】 食物がいたむ
- 【⑤】 いい人びる人
- 【⑥】 凄く
- 【⑦】 あなたたち
- 【⑧】 私の家
- 【⑨】 気がくしゃくしゃする
- 【⑩】 エソパフンウニ
- 【⑪】 食べなさい
- 【⑫】 カモメ
- 【⑬】 いじる 触る
- 【⑭】 つつく
- 【⑮】 簡単でない
- 【⑯】 子どもたち

★ 奨励賞

『半分のふるさと』を読んだ



鷺泊小学校 六年 須田 海司 すだ かいじ

あなたは、「ふるさと」と言った感じが思っていたらどうか。ぼくは、ここに尻を思う。

この本の題名は、「ふるさと」ではなく、『半分のふるさと』だ。半分とは、何を表しているのだろうか。半分ということとは、もう半分もあるのだろうかと思ひ、この本を読むことになった。

この本は、韓国が日本の植民地だったところに、日本に住んでいた李相琴さんと、その家族の話である。相琴さんは、広島の前で生まれた。両親からは、キマと呼ばれた。小学生になったキマちゃんみんなにいじめられるため宇品に引っ越した。それから江田島に引っ越し、鷺部小学校に転校した。さらに、また引っ越して江田島小学校に転校した。そして、大分県中津で終戦をむかえた。それから韓国に帰ったのである。

ぼくは、この本を読んで、すべてが心に残った。その中でも特に心に残ったことがある。

それは、創氏改名令によって、日本に住んでいた朝鮮人たちが名前を日本名にしなければいけなかったということだ。

なぜ心に残ったかと言うと、自分が相琴さんと同じように、祖国を支配している国で生まれ、名前を変えるように言われても、絶対に断ると思ひ。

しかし、そのようなことをしていた日本人は、ひどいと思ったからだ。そして、自分の名前と家族の名前を樂しそくに考えているのは、あつきないじだと思ひ。

この本を読んでわかったことは、日本に支配されて、いじめられたりと、つらいこともあるから心に残るといふこと。祖国というものは、貧しいからこそ、おくれているからこそ見捨てられないということだ。

自分がこの本を読んで変わったのは、日本は戦争でただ負けただけで、悪いことは、あまりしていないと思っていた。そして、他の国は、そこまでいやな思いをしていないとも思っていた。しかし、そうではないということがわかり、悲しかった。そして、朝鮮人は良いイメージも悪いイメージもなかったが、とてもがんばってきた国なのだなと思つたようになった。

戦争は、あつてはならない。戦争で、だれも悲しまないことはない。しかし、今も世界では争いが続いている。

このような争いをなくすには、まず、理解することが大切だ。戦争や、日本と韓国の関係、植民地について興味がある人はぜひこの本を読んでみてはどうだろうか。

【講評】
トウキョウ

植民地支配がテーマのこの本を読んで、戦争は二度と起きてはならない、戦争が起きないためには、お互いの理解が必要だと、自分なりの見解と今後の世界の平和の願いが込められている。



中学校の部

☆ 優秀作

『不滅のウイルス』を読んで



鷺泊中学校 三年 寺田 はな てらた

『不滅のウイルス』は、T細胞型急性白血病を高校一年生で再々発した十七歳の少年が、数学者フンドリユー・ウイルスの精神に共鳴し、「ウイルス」の名で闘病生活を記録したものである。

この世界には、今も病気で苦しんでいる人が多くいて、ウイルスもその中の一人であった。ウイルスは、白血病により病院での生活が多く、学校にも行けず、家にも帰れない、外にも出られないという状況が続いた。そして彼は外に出て、家で暮らし、学校に行くことを望んでいた。病院では話し相手も医者か看護師か親がほとんどであり、彼にとって学校で友人と遊ぶことが一番楽しい時間であり、ストレスの発散ができる時間でもあったからだ。そんな彼の生活を知り、私は自分の今の生活がとても恵まれていると感じた。

朝起きて眠い中、学校へ行き、友人と話して勉強し家に帰る。そして、時には友人や家族とぶつかり合う。そんな生活が私の中で当たり前だった。けれど、私はそんな私の中の当たり前前の生活も幸せを感じる事が難しく、苦痛を感じながら生きなければならなかった。また、私にはまだ余裕があって、やりたいことがその日にできなかったらまた次の日にやればいいと思える。しかし彼は、病気が悪化して、やりたいことが次の日にはもう出来なくなってしまうという可能性があるのだ。これらのことから、私は自分の今の生活が当たり前ではないと思っ、普段関わ

る人達にもっと感謝をして、もっと関わっていき、また、今出来ることでやりたいことに挑戦していきたくと思った。

ウイルスは十七年と半年という短い人生での九年一ヶ月という半分以上を白血病と向き合った。その上彼は、最期の瞬間まで諦めず、様々な苦痛を耐え抜き、限界まで戦い、生き続けたのだ。それは彼だけではなく、今でも病気を闘っている人がいる。私は、このことを忘れずに、普段の日常に感謝し、努力を怠らないで諦めずに精一杯生きていきたいと思った。

彼は「死」について、「今の教育では死について子ども達は全く理解できていない」、「特別なことでも、恐れるべきことでも、辛いことでも、苦しいことでもない、ということをお教してほしい」という言葉を恩師達へ残した。私達はずっと「死」について考えるべきではないだろうか。そして、かつて笑いながら自分の葬儀を指示し、遺書を書いた子どもがいたことを皆さんにも知ってほしいと思う。

【講評】

死ぬことを恐怖するのではなく、どんなことがあっても、最期の瞬間まで必死に生きる。その生き様には、憧れすら抱きます。寺田さんの生活と「ウイルス」の生活がまったく違うものだったように、人生は人それぞれ様々です。そして、その長さに差はあれど、人は誰もいつかは死んでしまふし、死ぬことを怖いと思うのは最も自然なことです。そんな感覚も認めながら、自分の人生を全力で生き抜くために、「死ぬまでをどう生きるか」を考えることが大切なのだ。この文章を読んで感じました。彼が「不滅」なのはなぜか。タイトルに関わってさらに考えてみる。もっと読み深めることが出来るかもしれません。



★ 優秀作

『余命10年』を読んで



鬼脇中学校 三年 牧野 まきの 秦夏 たいが

もしも、今この瞬間に余命宣告をされたらあなたはどの感じるだろうか。もしも、あと十年しか生きることができないと言われたら残りの十年をどう生きるだろうか。僕が余命宣告をされて、残りの十年しか生きることができないとなった僕はどの感じるだろうか。

小坂流加さんが書いた『余命10年』を読んで僕はこんなことを考えるようになった。

僕が残りの十年しか生きることができないと余命宣告されたら、僕は自分がやりたいと思っていることをすべてやり尽くすだろう。たとえそれがどんなに難しいことであっても、たとえそれがほんのちっぽけなことであっても。家族と大きな旅行に行く、友達と遊びまくる、海外旅行に行く、一人の時間を有意義に過ごす。他にも数え切れないほどあるがそれをすべて叶えようと努力するだろう。

この本は数万人に一人という不治の病にかかり、余命が十年であることを知る主人公の茉莉。笑顔でいなければ周りが追いつめられる。何かをはじめても志半ばで諦めなくてはならない。残り少ない人生の中で生きることに執着しないため、彼女は恋だけはしないと決めていた。そんな中、彼女は同窓会でかつての同級生の和人と再会する。これをきっかけに二人は急接近、茉莉はもう会ってはいけないと思いつつも、自らの病気を隠して、どこどこでもいる男女のように和人と楽しい時間を重ねていく。思い出が増える度に、少なくなっていく残された時間。二人は最後にどんな道を選ぶのかとどうお話である。

原作者の小坂流加さんは本作の主人公と同じ難病、原発性肺高血圧症を抱えていた。それを知った僕はこの本を読み続ける度、気づかないうちにとんだんに感情移入していた。

十年は長いように見えて短いのではないか、あつという間に過ぎてしまつのではないか。茉莉は十年の中で何を考えていたのか、どんなことを思いついて生きてきたのか。この本の中には「やあやあやあやあや。死ぬ準備を始めなくては。」と綴られていくところがある。その場面を読んだとき、僕はどうしても生きられないのだろうかとても悔しい気持ちになった。この世の中には病で悩んでいる人はたくさんいる。なんとか治せないのか、どうにかして生きさせてあげられないのだろうか、僕だったらどんな言葉をかけていたのだろうか。この言葉でたくさんの方のことを考えさせられた。余命宣告はいつ、誰に起こるかわからないことだ。僕とは程遠いものではなく、とても身近に感じてしまつほど、このセリフが一番心に残っている。

命についてどう考えるのか、自分なら残り少ない人生をどう生きるのか。普段なら当たり前前に生きているこの生活に対しての考え方が、この本を読んでから少し変わったような気がする。この素晴らしい作品がたくさんの方の目について、この世の中を生きている人みんなが命について、今生きていることが当たり前ではないことを知った上でどう生きるのか。ほんの少し知りたいと思った。

【講評】

この本と出会い、「自分だったら……」「この時どう思っていたのか」と作品に問いかけ、登場人物に寄り添いながら本を読んだことがとても伝わります。主人公の生き方から命のはかなさや尊厳を学び、自分の命を最大限輝かせる生き方をしていく。そんな秦夏くんの決意が感じられます。これから新たな環境になつても、その決意を忘れることなく過していく。そして、また「思い出が増えるほど時間は少なくなると」「十年は長いようで短い」などの対比表現が見られ、印象に残りました。

★ 佳作

『かくれ家のアンネ・フランク』を読んで



鷺沼中学校 一年 黒川 結凪

私がこの本を選んだ理由は、戦争を知らないからです。確かに本やテレビなどで見ることはありますが、実際の怖さや戦時中の大変さをあまり知らないなと思ったからです。

この本は、ユダヤ人というだけで、第二次世界大戦中に命を落としてしまう少女、アンネ・フランクをえがいています。そして今でも、紛争がなくならず、アンネと同じように恐れながら必死で生きている子どもたちがたくさんいるとも書かれています。

私はこの本で印象に残った言葉が二つあります。

一つは、「人は、時代や場所を選んで生まれる」といえます。「と」という言葉です。本当にその通りだと思いました。私も、この時代に生まれてきたかったとか、「ここに生まれなかったなと思うことがあります。でも、アンネに比べると、自分はゆっくいな時代に生まれ、ゆっくいな場所で育ったと思います。食べ物だって食べたいときに食べられます。水だって、蛇口をひねるだけで安全な水がでてきます。世界の中では、食べ物や水を手に入れることの出来ない国もあります。なので、私は、今の環境を大切にしようと思いました。」

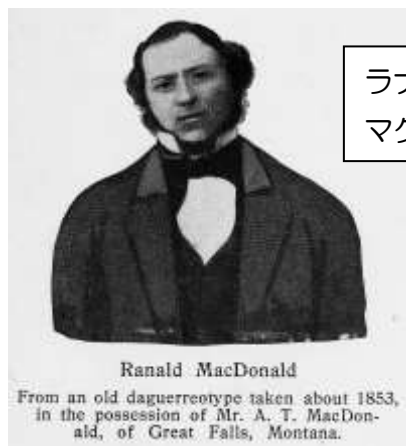
もう一つは、「アンネ・フランクは、けして過去ではない!」という言葉です。この言葉は、今でも紛争がなくならず、アンネと同じような思いをしている子どもたちがたくさんいるという意味です。私は、それをきいて「じつは紛争や戦争がなくならないんだろ?。」と疑問に思いました。私は時々、募金ボックスを見かけるとお金を入れることがあります。



アンネ・フランク



ラルド・マクドナルド



【講評】

戦後七十七年を迎え、実際に戦争を体験した人も少なくなっている中、このまま歴史の悲劇を風化させることは決してならないことだと考えさせられました。昨今、ニュースを騒がせてはいますが、実際に「戦争」と言われても、実感が湧かず、「どこか遠い話のよう」に聞こえる人は多いと思います。その中で、戦争のじつを知らないから知ろう、という黒川さんの行動は素晴らしいです。じつからもその姿勢を大切にしたいです。

ます。でも、このように世界の中で紛争がなくならなければ意味がないと思います。一人一人が戦争は二度としてはいけないという思いを持たなければ紛争はなくならないと思います。そして私は、この本をもっとたくさんの人に読んでもらいたいと思いました。この本を読んでもらい、戦争は二度としてはいけないということと色々な人がわかってほしいと思いました。そして、アンネのような思いをする人が減ってほしいと思いました。

★ 佳作

思ひ出のおこぼれ



鷺泊中学校 二年 出張 てはり 星空 そら

私はこの本を読んで考えさせられた言葉があります。

「幸せ」とはなにが。

私はこの本を読むまでは、幸せは毎日感じるものではないかと思っていました。なぜなら周りと比較してしまい自分は「不幸」な人間だと思っ
ていたからです。

この本は家族の物語です。妻が離れ、そして息子は亡くなってしまいます。自分は幸せになれない人間だと思っていた父は、亡くなってしまった息子からの手紙を受け取りました。手紙には「いつかまた、一緒に
おしるこ食べよう」と書かれていたのです。父は、私は一人ではない、孤独じゃないことを知りました。そしてその後、普段から幸せを感じながら生活することができたという物語です。

私は本を読み、一つ疑問に思うことがありました。なぜ父は息子からの手紙で私は一人ではない、孤独ではないと思えたのだろうかということ
です。しかし物語を読み終えてから考えてみたら、離れてしまった息子からの手紙があり、昔の思ひ出のおしるこの話をしてくれて昔みたいに
息子と一緒にいた気持ちになったからだと気付くことができました。

私がおしるこの立場であったら、手紙を読んでも不幸な人間だと感じていた
と思います。なぜなら、息子と一緒におしるこを食べられないので、やっぱり自分は一人なんだなと感じてしまっからです。

私はこの本を読んで「幸せとは美味しいものを食べて美味しいと感じ、その気持ちを誰かに伝えたいと思う気持ち」という言葉がとても印象に

残りました。また「誰かと気持ちが一つになる瞬間を、幸せと呼ぶのではないか。」私はこの言葉から毎日「幸せ」を感じているのだなと思いました。幸せは、欲しいものを買ってもらえたり、友達に誕生日を祝われたりする、時々しかないことではないことをこの本は教えてくれました。

この物語を通して、私は「不幸な人間だ」と思っても、普段から生きていることが幸せなことと思える人になり、絶対「私は不幸な人間だ。」という言葉を出さないようにしたいです。また自分の「幸せ」を周りと比較しないで、自分の「幸せ」を掴み取ることを大切に生きていきたいです。

【講評】

人は、比べることを自然としてしまいます。自分はおの人と比べて全然できていない……、あの人よりは自分の方が上手い……など。しかし、「幸せ」を比べることに意味はありません。出張さんがこの本を読んで気付いたとおり、誰かと比べない、自分が「幸せ」だと思つものが「幸せ」です。自分にとつての「幸せ」を見つけたとき、きっと温かい気持ちになります。そして、それは案外「おしるこ」のように身近にあるものなのかもしれませんね。



★ 佳作

『14歳』



鬼脇中学校 二年 尾上 おとめ

私がこの本を選んだ理由は、一度軽く目を通したときにいつもテレビで見ている千原ジュニアさんからは考えられない過去だったのでこの本に興味を持ったからです。

この本は、十四歳の千原ジュニアさんが家に引きこもって一人で自分自身と向き合っていたときに、兄である千原せいじさんの振る舞いや言葉に助けられるという内容です。

印象に残ったところは二つあります。まず一つ目は、兄のせいじさんが千原ジュニアさんを芸能界に誘った場面です。理由は、もしせいじさんが芸能界に誘っていなかったら千原ジュニアさんはずっと家に引きこもったままだったかもしれないと考えると、せいじさんは一人の人を助けた凄い人だなと思ったからです。

二つ目は、兄のせいじさんが、「変わってるやろ、うちの弟」と彼そのままを受け入れている場面です。理由は、他の人とは少し違う弟を怒ったり、弟の意見に反対せず弟のことを本当に思ってくれている兄でとてもカッコいいなと思ったからです。もし私が兄のせいじさんの立場なら何も意見を聞かず怒ってしまってもいいかもしれません。

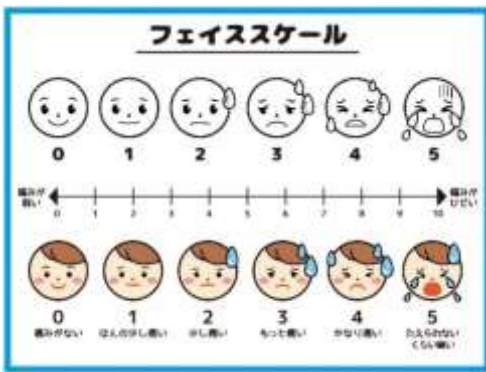
この本の十四歳の引きこもりも、いじめなどが原因ではなく自分の中でたまっていたものや、学校への違和感などの独特な閉塞感のような苦しみを感じてしまっている人も少なからずリアルに伝わって今まで見てきた本の中心で一番苦しく感じました。



私は、引きこもりは正直甘えだと思っていました。けれどこの本を読んで引きこもっている人にも辛い思いをしていたり、他にも色々な理由があるんだなと思いました。これからは自分の兄弟でも知り合いでも千原ジュニアさんのような体験をしている人がいたらせいじさんのように優しくしたり、ちゃんと相手を受け入れて自分のできる限りのことはしてあげたいなと思いました。

【講評】

この本を通して、誰かと関わるとき視点が増え、「受け入れよう」という気持ちがより豊かになったのですね。見えている・聞いていることが全てではないという発見は、今後の人生においても心に留めてほしい、大切なことです。自分と同じ考えの人はいません。それはそれぞれの経験や環境が違ってくるからです。ジュニアさんはせいじさんに救われたように、「おとめさんの気付きが誰かのためになるときがきこもって来ようと思います。」「多様性」という言葉を耳にする機会が増えました。これから考えを広げたいの深めていきたいです。



出典：「ひきこもり支援推進事業」(厚生労働省) <https://hikikomori-voice-station.mhlw.go.jp/>

★ 佳作

『母さんの「あおいくま」を読んで』



鬼脇中学校 二年 河越 姫花

私は、『母さんの「あおいくま」』という本を読みました。この本を選んだ理由は、ずっと家にあっただけと読んでいたことがなくて気がなつたのでこの本を選びました。

この本の内容は、人気お笑いタレントの「ロッケさん」がお笑いタレントになるまで自分がしてきたことや、お母さんに言われたこと、してもらったことが書いてある本です。「ロッケさんは物心ついたときからお父さんがいなかったことをこの本を読んで初めて知りました。

この本を読んでおもしろいと感じたところはタイトルです。私はあおいくまはぬいぐるみのことだと思って読みはじめました。でも実際は、あおいくまとは「ロッケさん」がお母さんから教えられた心の持ち方でした。あせるな、おこるな、いばるな、くさるな、まけるな、五つの言葉の頭文字からできている言葉でした。私はこのことをタイトルから想像することができなかつたのでおもしろいと感じました。

印象に残った場面は二つあります。一つは「お母さんに芸能人になりたいと伝えた場面です。なぜなら、お母さんはそのことに対して反対し、「ロッケさんが反抗したからです。」「ロッケさんはどうしても芸能人になりたいんだな」とこの場面から感じました。

二つ目は、近所のおばさんたちがお母さんの悪口を言っていて「ロッケさんがあいつをやる場面です。なぜなら、「ロッケさんが一回だけでなく別の日もあいつをやる、おばさんたちが優しくなっていたか

らです。あいつはただ言っただけでなく相手の関係を良くすることができると学びました。

心に残ったセリフは、「後輩たちに教えられることはなんでも教えたいい、質問されればネタバラシだってする。」です。なぜなら、たとえ後輩でもライバルだと思ったからです。アドバイスをしたり、ネタバラシをする自分よりおもしろくなってしまうと、抜かされてしまつと思ひました。私だったらアドバイスはしても、ネタバラシはしないと思います。抜かされてしまつのが怖いからです。なので、「ロッケさんはとても優しい人だと思いました。

「ロッケさんの家は貧乏だったそうです。なので、「ロッケさんは自分の欲しかったCDやDVDを買うために新聞配達の仕事をして」と思いました。私もアルバイトができるようになったらもらつてばかりではなく、自分でお金をためようと思ひました。

この本を読んで、人に認められなくてもあきらめなければいつか認められる日がくるということを学びました。私も、「ロッケさんのように自分のやりたい職業につくためにがんばろうと思ひました。そして、何かをしてみようと思ひました。

【講評】

「あおいくま」私もぬいぐるみのことが思ひました。でもそれは「ロッケさん」のお母さんからの、愛のある教訓だったのです。私の心にも刻まれました。「ロッケさんのように」「いっしょに」「いっしょに」「いっしょに」と思ひたり、「何が何でもOOOしたい」「強い決意を抱いている人が、どわんといっしょに」「いっしょに」「いっしょに」その中で、その決意を叶える方法の一つを、姫花さんはもつ知っています。他の人の経験から発見して、自分の財産となぬいぐるみは、まさに読書の良友だと改めて感じました。

★ 佳作

『夜のピクニック』



鬼脇中学校 一年 佐々木 日馬
ささき はるま

自分がこの本を選んだ理由は、夜にピクニック?とタイトルに興味を持ったからです。

この本は異母兄弟で距離を置いていた二人が、一日中歩き続ける歩行祭を機に距離を縮めようとする、というものです。

印象に残ったところは二つあって、一つ目は、アメリカにいる杏奈が好きなのは実は主人公の西脇融だったと明かされることです。サブ的なストーリーなのにメインストーリーに絡ませてくるのがとても意外でした。そう思った理由は明らかにメインとサブで分けているのにつながら、というのは自分が今まで読んだ小説の中で一番複雑な構成だと思ったからです。

二つ目は主人公の二人が仲良くなった時に何もなかったかのように話すとことです。仲が最悪だった二人が、

「あつとつまだったなあ。」

「何が。」

「歩行祭。」

という会話をしているのですが、仲が悪いようで実はこんな友達みたいな会話が出来る、というのが印象的でした。そう思った理由も一つ目と同じで小説をあまり読まない自分には初めての展開だからです。いつもはあの程度予想は出来るのですが予想外の展開に驚き、印象に残りました。

自分にも仲の悪い人はいて、自分は、どうせ合わないし無理して仲良くする必要はないなと思っていました。でも、二人の行動を見て、案外

それは決めつけだったのかなと思いました。

それとは逆に結構仲の良い人もいます。よく遊んだりします。でも、主人公とその友達は互いのために何かをしたり、してもらったりしています。自分はそんなこと一回もしたことないな、と少し申し訳なく思いました。助けるということを気軽に出来る関係が友達なのかなと思います。すぐ友達友達と言っていた自分が変に思えました。仲の悪い人に近づいて、仲良くなろうというのは、なかなか難しいことだと思いましたが、失敗したらで本当にこの人とは合わないんだなと確認が出来るし、もしかしたら二人の主人公のように意外とその人の良いところなどが分かることもあるかもしれないので、何事も挑戦からと言いますが、全くその通りだと思います。

この本を読んで自分が変わったと思うところは、友達への考え方です。今までは友達とは趣味が合ったり、共通点があって楽しく過ごせるような人というイメージでした。でもこの本で今までの考えに加え、助け合うことが出来るというのが大事だと思いました。自分は自己中心的な部分があるのですが、それでは友達なんて出来ないのです。適度に主張したりゆずったりするのが一番良いと思いますし、自分もそれを実践してみようと思いました。

【講評】

日馬くんの読書感想文を読んでびっくりしたことがあります。それは、本の構成に注目していたことです。作者の語彙やストーリーの展開だけではなく、構成の良きにも気付いて読んでくれたら、作者の恩田陸さんも嬉しいはずですよ。

「友達」の定義。とても難しいですね。しかし、人それぞれの定義があつていいのだと思います。仲の良い人との関わり方、これからもっと仲良くなるかもしれない人との関わり方など、多方面から考えて言葉にまとめることができそうです。

★ 奨励賞

『世界がもし100人の村だったら』



鷺泊中学校 三年 入井 蒼士

この本は、世界の人口を100人に置き換えて色んな視点で物事を捉えている本である。国語の先生が何冊か本を紹介してくれたときにこの本を少しめくって読んでみたら今の世界の現状と同じだと思ったのでこの本にしよう。

この本を読んで印象に残っている事柄が三つある。

一つ目は、この世界の二十%の人が栄養不足な状態にあることに対して十分な食事、きれいな飲み水ですら手に入られない地域を目にしたことがある。日本に住んでいれば、重度の栄養不足になることはほとんどないだろう。食糧不足により困ることもきつくない。そんな恵まれた環境である僕たちは、できるだけ食品ロスをなくすべきだと思う。給食を残せば捨てる、まだ食べられる食材を処分する、そんなことが日本のあちこちで起っているだろう。鷺泊小学校と中学校の給食の残食率は二十%だと聞いた。これを一年間続けていたら、と考えると、僕たちにもできることがあるのだと思う。

二つ目は、エネルギーを十分に使える人の割合である。この世界の二十%の人間が八十%のエネルギーを使うことができ、八十%の人間が二十%のエネルギーしか使えないそうだ。僕を含め日本人はおそらく二十%の人間なので無駄遣いを減らす必要がある。具体策として、節電や節水、節約したお金で募金をすれば外国の貧困層を間接的に支援するのじがひかれる。

三つ目は安全に暮らせる環境のことである。台風を防ぐことができる環境にいる人は全体の約七十五%、残りの二十五%はきれいな水を飲むことができず、住まいも危険なのだそうだ。僕たちは前者であると言えるが、これを当たり前だと思っはいけない。もっと貧しくて家がない子や安全ではない人などもある。これは自分の力ではなく、保護者やこれまでの歴史上の人物など、たくさんの方が創り上げてきた成果だと思う。だからこそ感謝を忘れずに言葉にしていきたい。例えば日本語には「いただきます」「ごちそうさま」という言葉がある。これは、作った人、食べ物、生産者、動物、環境など、広い範囲に感謝の気持ちを伝える言葉である。このような身近な言葉こそ、その意味を考えて使っていくべき。

これらの内容を見たときに、この考え方は「SDGs」と同じだということに気付いた。この本はおよそ二十年前に発行されている。これほど前から、世界全体で手を取り合って助け合おうという考えがあることを知り、あまり向上していない現実があるということ、世界一人一人の意識や協力がなく地球や命が守られていないと強く感じた。これからは、行動一つ一つの意味を考え、自分にできることは何か考えながら過していききたい。

【講評】

いま、世界人口は八十億に近づきつつあります。相当な数です。百人で捉えた後、その割合を実際の人口数に直してみても、その数の多さに愕然とします。自分たちはいま不便のない生活を送っているけれど、地球に住む他の誰かはそのうちではない、という気付きから、自分たちにはできることはなにかを考えていきたいという入井さんの意志は素晴らしいです。どんなに小さなアクションでも、大切な一歩です。今後の生活に活かしていくってほしいと思います。

★ 奨励賞

『海の祭礼』



鷺沼中学校 三年 西島 にしじま 一樹 かずき

歴史人物や歴史上の出来事を、自分の身に置き換えて考えたことがあるだろうか。それに親近感を持ったことがあるだろうか。利尻島では、教科書に載るような歴史的な戦いは起きていない。この場所での戦いが起きたのか、なんて思えるときこそ楽しいのだろうか、歴史を肌で感じることはなかった。この本を読むまでは。

家の本棚に、赤い表紙の本があった。

『海の祭礼』

父に聞くと、ラナルド・マクドナルドという人の話らしい。

彼は江戸時代、鎖国下の日本に密入国し、日本人に英語を教えたアメリカ人。そのマクドナルドの上陸した地が、ここ利尻島だ。これは面白い本だ。一気に読み進めた。

江戸時代後期、利尻島には百名ほどのアイヌが住んでいた。江戸幕府は厳重な鎖国を取っており、入国するのは簡単ではなかった。そう考えたマクドナルドはアメリカの捕鯨船の乗組員になり、日本に近づいた時に捕鯨船を降りるといふ作戦を思いつく。ペリー来航の五年前となる一八四八年、マクドナルドは捕鯨船から小さなボートを譲り受け、遭難者を装って利尻島野塚の沖にやってきた。

冒頭からわくわくする内容だ。江戸時代にこんな冒険をしようとするアメリカ人がいたことに驚く。島民に救助されたマクドナルドは野塚から本泊に行き、長崎まで移送される。

長崎では寺に幽閉され、幕府の役人から取り調べを受けることになる。しかし、マクドナルドのおだやかな人柄が見込まれ、長崎奉行所の通詞（通訳のこと）十数名に英語を教えることになった。そのいきさつが面白い。なにしろ当時の長崎はオランダ語なまりの英語しか流通しておらず、英語のネイティブスピーカーから直接英語を教えてもらうのは初めてのことだ。マクドナルドの発する言葉のひとつひとつが衝撃だっただろう。通詞たちは熱心に英語を学び、マクドナルドとの友情も芽生えていった。

マクドナルドは、その後アメリカ船がむかえに来て日本を去る。マクドナルドから英語を教えてもらった通詞のうち、森山栄之助と堀達之助は、ペリー来航時の通訳として活躍した。日本の歴史の重大な局面にマクドナルドが関わっていたことはとても興味深い。

『海の祭礼』を執筆するにあたり、作者の吉村昭は利尻島まで足を運び、取材をしたそうだ。村人の名前や島の様子をはじめ、マクドナルドが上陸した浜に立ち、そこに咲いていた花にまで興味を持って調査をしたそうだ。

利尻から世界へ。とても面白い本に出会えた。

【講評】

自分の住んでいる地域をテーマした作品は、親近感があって読みやすいですね。そして、西島さんの言うとおり、鎖国下の中利尻を訪れた外国人が歴史的出来事に関わっているとは、とても興味深いです。新たな知識を得ることは、新しい冒険のはじまりです。本を読んだ後、本の世界を飛び出して、さらに気になったことを調べてみたり、実際にその地を訪れてみたりすると、新しい発見があるかもしれません。そんな探究心を大切にしてください。

★ 奨励賞

『西の魔女が死んだ』



鬼脇中学校 一年 牧野 まきの 結来 ゆら

『西の魔女が死んだ』

あなたはこの言葉を聞いてどう思いますか？西の魔女とは誰なのか、死ぬとはどれくらい重たいものなのか。

梨木香歩さんの『西の魔女が死んだ』を読んで、私は様々なことについての視野がとても広がったと思います。

まず、『西の魔女が死んだ』という本について簡単に説明します。中学に進んでまもなく、とうとうとも学校へ足が向かなくなった少女まいは、季節が初夏へと移り変わるひと月あまりを西の魔女のもとで過ごしました。西の魔女ことママのママ、つまり大好きなおばあちゃんから、まいは魔女修行の肝心かなめは、何でも自分で決める、ということをお伝えされました。喜びも希望も、もちろん幸せも…。その後のまいはどうなっていくのか、というお話になっています。

そんなこの本があらわす『西の魔女が死んだ』とは大切なおばあちゃんの死のことです。やさしいおばあちゃんにも寿命があります。それは誰もが意識しなければいけない「人生の期限」を象徴するものであるのではないかと私は感じました。普段当たり前のように過ごしている毎日はいつか、急に終わってしまうかもしれない。それは自分だけに限らず、周りの人にもその瞬間はいつか訪れます。この本を読んで、この世界には自分の命だけではなく、周りの人にも大切な命があるということをお教えるにしているのではないかと感じました。それと同時に他人を尊重する大切さにも気づくことができました。

まいのおばあちゃんが亡くなってしまつ前に、まいはおばあちゃんと「死んだらどうなってしまうのか」という会話を交わしています。その時におばあちゃんはこう答えました。「死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだよ、おばあちゃんは思っています。」

この言葉を答えた後、もし本当にそうなら、それがわかるようなメッセージをまいに残すと伝えていきます。そして実際におばあちゃんが亡くなってしまった時、「ニシノマジヨカラヒガシノマジヨへオバアチャンノタマシイ、ダッシュユツ、ダイセイコウ」というメッセージが残されていました。西の魔女であるおばあちゃんから、東の魔女のまいへ魂が移った瞬間。ここでもまた命の大切さ、受け継がれることの素晴らしさを知りました。

普段当たり前のように過ごしているこの生活も、この命もいつ何が起るかは誰にもわかりません。この世の人々はたくさん抱えながらも生活しています。改めて命の大切さに気づけたこの本が、たくさんの人々の目についてほしいです。そして、命の大切さに気づいた今、これからどう生きていくのか、しっかりと考えて過ごしていきたいと思います。

【講評】

私もこの本を読んだことがありません。結来さんが気になったように、私もタイトルのインパクトの強さに惹かれ、この本と出会いました。命が絶えることは終わりを意味するのではなく、受け継がれることだ。この本を通して学んだのです。一貫して、タイトルの意味についての感想を書いてくれたので、以前私が読んだ時より考えを深めるきっかけとなりました。「生きている」を書いた本でありながら、タイトルには「死んだ」とあり、逆のことが書いてあるんだなあ、と新発見。結来さんの読書感想文のおかげです。

『一人ひとりの世界』

第三十六回読書感想文コンクール審査委員長

鷺泊中学校 小泉 由佳

今年も各学校で読書感想文コンクールに向けて取り組んでくださり、ありがとうございます。

本校だけではなく、他校の児童・生徒の皆さんの読書感想文を読ませてもらい、読書の楽しさを私自身が感じることができました。

読書が苦手な人、普段から本を読む習慣がない人からすれば、本当に大変な課題でしたね。しかし、この課題をクリアした人はもれなくレベルアップしているはずですよ。「苦手なことをやり遂げた」「新しい本を読み切った」「自分の考えが広がった」「どうしたら考えが伝わるか言葉を選んで書いた」など、何事もやったことで得られるものが必ずあります。

私は読書が好きです。本を読むと、自分が経験していないことを知ったり、人の気持ちをのぞいたりできるのが新鮮だからです。

友達とけんかする小学校四年生になったことがあります。兄が突然いなくなり、必死に探す妹にも。人の才能をねたみ、嫉妬に狂う人にも。宇宙飛行士や探偵、芸人にもなったことがあります。時には国を超えてアメリカの学校に通い、今もある差別をひしひしと感じることもありました。

これらは、実際に経験したことではありませんし、こんなにたくさん経験を見てきたにも関わらず、物語が終わることはありません。色んな人がいて、色んな考えがある。相手を知ったり世界を広げたりするための第一歩に、読書も入るのではないかと私は思っています。さらに、同じ本を誰かと共有できたら、もっと楽しいでしょう。きっと自分とは違う新しい世界が広がっているからです。今回、皆さんの読書感想文を見ることで、私の世界はより広がりました。読書感想文を書いてくれたこと、改めて皆さんにありがとうございますと伝えたいです。読書は世界を広げるチャンスです。何年もかけて、自分の心に響く一冊を見つけてみてください。



【第三十六回 読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部

鷺小 一点
利小 〇点

■小学校五学年の部

鷺小 十三点
利小 八点

■小学校二学年の部

鷺小 六点
利小 二点

■小学校六学年の部

鷺小 十点
利小 三点

■小学校三学年の部

鷺小 九点
利小 六点

■中学校の部

鷺中 四十一点
鬼中 十二点

■小学校四学年の部

鷺小 十四点
利小 五点

小学校計	七十七点
中学校計	五十三点
合計	百三十点

【審査の先生】

鷺泊小学校・・・・・・・・・・坂本雄真先生
利尻小学校・・・・・・・・・・藤井陽平先生
鷺泊中学校・・・・・・・・・・小泉由佳先生
鬼脇中学校・・・・・・・・・・上村海帆先生

【表紙イラスト】 上村 海帆

●令和四年度 第三十六回読書感想文コンクールを終えて

読書感想文コンクールに、応募していただいた児童・生徒の皆さん、ご協力ありがとうございました。

また、各学校の校長先生はじめ諸先生方には、作品の取りまとめから審査に加え、表彰に至るまで、お力添えを頂き厚くお礼申し上げます。

毎年、宿題を増やしてはいますが、自分の考えたことを指定された文字数の文章にするのは難しいよね。でも、正解はなくて「自分の思い」を、「自分の言葉」で「自由」に書いていいんだ。最初から上手く文章を書けなくても良いじゃないか！この宿題こそが、文章を書くための訓練なんだから。

って、偉そうに書いてるのよ！の文章をWordで文章校正すると「くだけた表現」と指導を受けている始末…。

最後に一言。低学年の作品が、去年より少なくて寂しかったなあ。

令和四年十一月発行

利尻富士町教育委員会 鬼脇公民館業務係

この一冊に、ありがとう



2022 第76回 読書週間標語